

〈研究ノート〉

## 東山大仏と豊臣政権期の京都

——秀吉在世時を中心に——

河内 将芳

### はじめに

筆者は、以前、豊臣（羽柴）秀吉によって京都東山に造立された大仏について、おもに秀吉やその政権の観点から、その実態を検討したことがある。<sup>(1)</sup>しかしながら、ここでは、大仏が京都に存在することの意味を十分には深めることができなかった。そこで、本稿では、あらためて都市京都との関係に焦点をあて、その歴史的な意味を考えてみたいと思う。

この点に関連して研究史をひもといてみると、おもな議論としてくりひろげられてきたのが、大仏とほぼ時期を同じくして京都で普請がすすめられた聚楽第・聚楽城下町との関係をめぐってのものであったことがわかる。

その嚆矢は、おそらく、一九六九年刊行の『京都の歴史 4 桃山の開花』<sup>(2)</sup>におさめられた第3章第2節「聚楽第と方広寺」（黒川直則氏執筆分担）であったのではないかと考えられる。もともと、そこでは聚楽第と大仏に関するおのの叙述はなされていて、かならずしも相互の関係にまでふれたものとはいえなかった。

したがって、本格的な議論としては、一九八六年に三鬼清一郎氏によって発表された論考「方広寺大仏殿の造営に関する一考察」<sup>(3)</sup>の登場まで待たなければならないであろう。この三鬼氏の論考は、大仏造立に関する基礎的な事実、とりわけ物資調達や労働力編成など、造営にかかわる具体的な事実をあきらかにしたものとしてよく知られていると同時に、聚楽第や聚楽城下町との関係についてもふれている点で重要といえよう。

その論考のなかで、三鬼氏は、「内裏に隣接する聚楽第からみれば、東福寺はほぼ南の方角にあたるが、その延長線上には奈良がある。つまり、秀吉は京都において、東大寺の方角に大仏殿の建立を思い立った」としたうえで、「方広寺は京都における南都寺院として、あらゆる種類の災害から皇城を守り、無限世界の浄化と鎮護国家を祈願する役割を担わされていたと思われる」との理解を示すことになる。

この三鬼氏の議論は、大仏の存在を聚楽第や聚楽城下町、あるいは京都との関係を視野に入れたものとしては最初であり、したがって、その後の研究が、三鬼氏の議論を出発点として検討が加えられるようになったのも当然といえよう。

たとえば、一九九二年に発表された西山克氏の論考「王権と善光寺如来堂」<sup>(4)</sup>においても、三鬼氏の議論が「方広寺構想」と名づけられたうえで、「私が違和感を感じているのは、むしろ三鬼氏が、方広寺構想の段階差を意識しておられない」と指摘するようにである。

ここでいう「段階差」とは、具体的には「文禄四年（一五九五）七月の秀次事件と、それによる「聚楽第城下町」構想の破綻」が「方広寺構想自体に影響を及ぼさなかったと言え」ないことをあらわしているが、それはつまり、大仏をとりまく環境の変化に注目することを意味していよう。

西山氏の場合、その関心は、あくまで文禄五年（一五九六）の大地震で大破した本尊にかわって「慶長二年（一五九七）の夏」に迎えられた善光寺如来にあり、「僅か一年一ヵ月」のあいだ「方広寺大仏殿が善光寺如来堂」であった意味を問うものとなっている。

しかしながら、その結果みちびかれた「文禄四年七月の「聚楽第城下町」構想の破綻が、方広寺の王城鎮護の寺としての性格を後退させ」、「異形の善光寺如来を選らんだところに、初期の方広寺構想の変質を看取することができる」との指摘は重要といえよう。

大仏が「王城鎮護の寺」<sup>(5)</sup>だったのかどうかについては、史料的な裏付けがとれないものの、大仏をとりまく環境の変化に注目することによって、「豊臣政権の権力中枢が大坂―伏見のラインに集中した結果、善光寺如来堂の位相が、京都より伏見に引きつけられてくる」との指摘がうみだされることになったからである。

本稿においても、このような大仏をとりまく環境の変化に注視していくものであるが、いずれにしても、西山氏の議論からもあきらかな

ように、大仏と京都との関係を考えていくにあたっては、もはや聚楽第や聚楽城下町との関係だけでは不十分といえよう。

そういう意味において注目しておく必要があるのは、二〇〇一年に発表された論考「近世京都の成立―京都改造を中心に」<sup>(6)</sup>のなかで、杉森哲也氏が「大仏殿は、京都改造が完了した天正十九年段階では完成していなかった」と指摘している点である。

杉森氏の場合、「方広寺大仏殿の造営」は「京都改造の一環」としてとらえられており、西山氏のように、「段階差」を意識しているわけではない。しかしながら、事実として、天正一九年（一五九一）のいわゆる「京都改造」が終了してもなお、大仏の普請がつづけられていた点にあらためて光をあてたことは重要と考えられるからである。

じつは、秀吉が造立した大仏は、天正一九年や文禄四年はおろか、少なくとも秀吉在世時には完成をみることはなかった。この予想外と思えるような事実にはまず注目する必要がある。

また、西山氏が指摘するように、大仏はたしかに「伏見に引きつけられて」いく側面をもっていた。しかしながら、大仏殿がたてられた場所そのものは変化がみられないのであり、したがって、その場所になぜ大仏が造立されたのか、その立地についてもあらためて注目していく必要がある。

そこで、本稿では、この二点、すなわち立地の問題と普請が未完におわったという事実に着目するとともに、大仏をとりまく環境の変化にも注視しながら、冒頭にかかげた目標にむかっていきたいと思う。

なお、本稿でいうところの大仏とは、大仏殿を中核とした一定の施設を意味している。秀吉の在世時でいえば、「大仏殿東」に「大仏千

僧会」の「会場」となる「経堂」が建立され、「大仏妙法院」ともよばれた妙法院や「大仏住持」<sup>(8)</sup>に任じられた聖護院道澄の照高院、さらには「大仏本願」<sup>(9)</sup>とよばれた木食応其の住坊などがふくまれる。

ただし、木食応其の住坊以外は、文禄四年以降に付属するようになるので、大仏とは、基本的には大仏殿と考えてよいであろう。また、「方広寺」という寺号についても、少なくとも近世前期まではそれがつかわれた形跡がみられない以上、本稿では、史料用語として出ている「大仏」のほうをつかっていきたいと思う。

# 一 立地について

## (1) 東福寺近所から三十三間堂北へ

さて、秀吉が京都に大仏を造立しようとしたことが確認できるのは、現在のところ、『兼見卿記』<sup>(11)</sup>天正一四年（一五八六）四月一日条が初見と考えられている。そして、そこには、つぎのような記事がしたためられている。

今日大坂へ御下向也、（中略）即御下向、至東福寺御出、此近所ニ可有御建立大仏、其地為御覽御出云々、

右によれば、この日、秀吉は、京都から「大坂へ御下向」することになっていたことが読みとれる。この段階での秀吉の京都宿所といえは、聚楽第（聚楽城）移徙以前となるので、妙顕寺跡に築かれた「二条城」<sup>(12)</sup>となる。

そして、そこから大坂へむかうにあたり、秀吉は「東福寺」に「御

出」するわけだが、その「御出」の目的とは、「此近所」に「大仏」を「御建立」するための「地」を「御覽」することにあつたとされている。

このとき秀吉が、どのようにして大坂まで「御下向」したのかということまではわからない。ただ、「東福寺」へ「御出」したという以上、おそらくは東福寺門前を通る法性寺大路（のちの「伏見開道」<sup>(13)</sup>）を南下して伏見にまでいたり、そこから船に乗って大坂へとたどりついたと考えるのが自然であろう。

もしそうであるなら、秀吉は大仏を京都から大坂へといたる道筋に「御建立」しようと考えていたことになる。

ただし、実際に立地されたのは、この東福寺の「近所」ではなかった。たとえば、イエズス会宣教師の報告書『一五八六年の報告書』<sup>(14)</sup>に、つぎのような記事がみとれるからである。

奈良の市の大仏を、金を塗った千余体の仏像のある都の大寺院（三十三間堂）<sup>(15)</sup>の附近に造ることを命じた。

ここからは、「金を塗った千余体の仏像のある都の大寺院（三十三間堂）」の附近に大仏をつくるよう秀吉が命じたことが読みとれる。そして、この記述が事実であつたことは、『言経卿記』天正一六年（一五八八）五月一五日条に「京都三十三間北ニ大仏殿可被建立」とみえる点からも裏づけられよう。

それにしてもなぜ、このように東福寺の「近所」から「三十三間北」へと実際の立地が変化したのであるうか。そのことを直接説明し

てくれるような史料は確認されていないが、この年、京都と大坂を頻繁に往復していた秀吉が、もう一カ所、たびたび下向していたところがあったという事実が関係しているのではないかと考えられる。

その一カ所とは、じつは近江国の大津であった。先にふれた『一五六七年の報告書』のつづきにも、「比叡山の麓近江の湖水に接した坂本といふ所に在った明智の城を破壊し、城も町も同所から一レグワ離れた大津といふ、尊土が都より安土山に往復された時数回宿泊された町に移すことを命じた」という記述がみられるからである。

ここからは、秀吉が大津において、坂本城にかわる城と城下町の普請にとりかかっていたことがあきらかとなるが、もともと、この時期、秀吉が普請をすすめていたのは、大津城だけではなかった。

たとえば、『宇野主水日記』<sup>(16)</sup> 天正一四年三月二日条にも、「京都内野辺三関白殿ノ御殿タテラルベキニ付而、二月下旬ヨリ諸大名在京シテ大普請ハジマル也、大坂ニハ中国之大名ノボリテ普請アリ、人足七八万、又八十万バカリアルベシ」とみえるように、「内野」の「関白ノ御殿」＝聚楽第（聚楽城）や「大坂」城も同じように築城がすすめられていたからである。

このようにしてみるとわかるように、京都に聚楽第（聚楽城）、大坂に大坂城、大津に大津城と複数の城普請を並行してすすめているさなか、さらに思い立ち、普請をおこなおうとしたのが大仏となる。

したがって、このようなながれとその立地が東福寺の「近所」から「三十三間北」へと変化したことが、まったくの無関係であるとは考えにくいであろう。

それでは、なぜ「三十三間北」だったのか、つぎにこの点について

みていくことにしよう。

## （2）汁谷

戦国期に描かれたことで知られる『上杉本洛中洛外図屏風』のなかで「三十三間」と書かれた墨書の北側をながめてみると、そこには「<sup>(汁谷)</sup>にめうほういん」という墨書を見いだすことができる。これは、「汁谷」の地に「妙法院」があったことをあらわしているが、同地に所在するのは妙法院だけではなかった。

たとえば、「汁谷仏光寺」の名で知られていた真宗寺院仏光寺もそのひとつである。ところが、仏光寺に残される『仏光寺派古文書』<sup>(17)</sup>には、「大仏殿就御造営、地形之事、被任上意、御忠節之段」<sup>(18)</sup>とみえ、「大仏殿」「御造営」にかかわる「地形」をめぐって、「上意」にしたがい、「御忠節」をほどこしたとの記述が確認できる。

もともと、これだけでは、「御忠節」の内容までを知ることにはできない。ただ、大仏造立以後に仏光寺が同地に所在していないことから考えて、近世中期、正徳元年（一七一）成立の『山城名勝志』<sup>(19)</sup>巻之四が伝えているように、「仏光寺」は「旧在洪谷、天正十五年大仏殿建立時、移之」つたとみるのが自然であろう。

となれば、焦点は「汁谷」という地がもつ意味にしばらくは移ってくる。「汁谷」とは、いったいどのような場所だったのか。この点について、史料をたぐっていくと、これより先、天文一一年（一五四二）、一二年（一五四三）ころの史料に「汁谷通路」や「汁谷口」という文言を見いだすことができる。

ここからは、「汁谷」に「通路」が通っており、京都側の出入口として「口」もひらかれていたことがあきらかとなる。そして、その同

じ史料によれば、「汁谷口」には、「山科花山郷」をへて、「法性寺柳原座中并大津松本門徒」とよばれた荷物や人びとの往還もあったことが知られる。<sup>21)</sup>

ここにみえる「法性寺」や「柳原」とは、「汁谷」周辺の地名を指し、また、「大津」や「松本」とは、近江国の地名を意味している。つまり、「汁谷」の地とは、大津城が築かれた「大津」や「山科」ともつながる交通の要衝であった。

ここから、天正一四年から一五、六年段階で秀吉が思い立った大仏の立地とは、大津と京都をつなぐ場所であると同時に、大坂へもつながる場所であったことがあきらかとなる。

したがって、当初の大仏の立地は、これまでいわれてきたような聚楽第やその城下町との関係というよりむしろ、この時期の秀吉の移動範囲や行動パターンに由来するものであったと考えるのが妥当であろう。

そのことをふまえたうえで、留意しておく必要があるのが、東福寺の「近所」にしても、「三十三間北」や「汁谷」にしても、いずれも鴨川より東側、鴨東の地であったという点である。いうまでもなく、洛中からそこへいたるには鴨川を渡らなければならないからである。

そのようにしてみたとき、天正一四年から一五、六年段階で鴨川に架けられていた橋が、四条橋と五条橋のほかになかったという事実も意味をもってこよう。三条橋が架けられるのは、これより少しくだった天正一八年（一五九〇）のことだが、それを架けたのがほかならない秀吉であったことをふまえるならば、<sup>22)</sup>大津への往復や、あるいは伏見を経由して大坂へ往復するためにも、五条橋を渡るのがもっとも合

理的だったと考えられるからである。そして、その五条橋を渡ってさほど遠くないところに「汁谷」の地はあった。

こうしてみると、三条橋の架橋と同じ年に中世以来の五条橋にかわって、「汁谷」により近い「六条坊門」にあらたな橋を秀吉が架けたことも理解しやすくなる。天正一九年（一五九一）の段階でもなお、七月や一二月には秀吉は京都と大津を往復するとともに、東国からの上洛途中には大津に立ちよったりしていることが確認できるからである。<sup>24)</sup>

このように、秀吉が大仏の造立を思い立った天正一四年から一五、六年に視点をみてみると、その立地が宗教的というよりむしろ、実利的な理由にあったことがうきほりとなってくる。実際、東福寺の「近所」や「三十三間北」とあるように、「近所」とか「北」とはみえても、それら寺院とのあいだには直接的な接点を見いだすことができないからである。

ところで、大仏のような、とりわけ巨大な施設は一度さだめられた場所に造立されてしまうと容易に動かすことはできない。しかしながら、時間の経過にともなって、秀吉の行動範囲や移動パターンのみならず、まわりの環境も変化し、それにより、同じ立地でありながら、そこにあるものの意味が変化していくことは当然ありえたであろう。

そして、そのような変化と大仏の普請が結果として完成をみなかったこととは密接にむすびついているように思われる。そこでつぎの章では、この点についてくわしくみていくことにしよう。



## 二 未完におわった普請について

## (1) 文禄五年閏七月の大地震以前

「汁谷」の地に立地がさだめられた大仏の普請は、天正一六年（一五八八）五月より本格的にはじめられる。たとえば、『多聞院日記』<sup>(25)</sup>五月一二日条に「京ニハ大仏建立トテ石壇ヲツミ土ヲ上テ、其上ニテ洛中上下ノ衆ニ餅酒下行シテヲトラセラル、」とみえるようにである。そして、それからおよそ六年後の文禄三年（一五九四）になってようやく出来にちかづく。同じく『多聞院日記』七月二二日条に「大仏も大旨出来」とあり、また、編纂物ではあるものの、『当代記』<sup>(26)</sup>文禄三年条にも「此比、東山之大仏漸出来之間、足代をも取、仏体をも塗、築山をも引」とみえるからである。

これだけを見てみると、文禄三年には大仏殿は完成にちかづいているかのように思える。しかしながら、実際はそうではなかった。たとえば、それからおよそ二年たった文禄五年（一五九六）正月二一日に「大仏中門柱二本立初」と『義演准后日記』同日条にはみえ、「大仏中門」の普請がはじめられ、およそひと月後の同記二月二五日条に「大仏中門、昨日柱悉建云々、今度本尊以下見物、広大無辺、殊勝無申計」とあるように、「大仏中門」の「柱悉建」ったことが読みとれるからである。

ここにみえる「大仏中門」の普請がはじめられた文禄五年といえ、すでに聚楽第（聚楽城）とその城下町は秀吉の手によって破却されている。立地がさだまった天正一四年から一五、六年ころとは大仏をとりまく環境が大きく変化していたことがあきらかとなる。

また、数々の城普請とくらべたとき、このように大仏の普請が遅々としたものであったのは、寺院建築であるという点もさることながら、天正二〇年（一五九二）一〇月一〇日付と考えられる秀吉朱印状に<sup>(27)</sup>「大仏にたてられ候わきの寺ノ普請作事、何も可相止候」「大仏之普請ハ先々被相止候間、柱共もおほいを仕可被置候」とあるように、文禄の役とよばれる対外戦争の用意と関連して「普請」「作事」がとめられたことなども影響していたと考えられる。

もちろん、対外戦争そのものや、秀吉自身が肥前名護屋へ出陣するといったことも影響をおよぼしているのは必至である。さらには、『三藐院記』<sup>(28)</sup>「豊臣秀次任内大臣次第」に「大仏造立の御志ニより日を送り給ふ処ニ、若公わつらい給、晩夏のころ御被川の水のあはとならせ給ひぬ」とあるように、天正一九年（一五九二）八月五日の「若公」（鶴松）死去に代表される、もつとも近い身内があいついで他界していったことも無関係ではないであろう。

しかしながら、いずれにしても、文禄五年段階においてもなお、大仏が完成にいたっていないかつたという事実にはあらためて注目しておく必要がある。ただ、それと同時に、同じ文禄五年五月六日に「従伏見太閤有御上洛、公家衆不残、於大仏有御迎事云々」と『孝亮宿称記』<sup>(29)</sup>同日条が伝えているように、あるいはまた、これから三日後の五月九日に「太閤若公」こと、御拾（秀頼）が伏見城から「初而出洛」するにあたって、「見物ニ大仏辺」まで出むいた人びとが多かつたと『義演准后日記』や『言経卿記』同日条が記しているように、西山氏が指摘する慶長二年よりまえにすでに大仏は「伏見に引きつけられて」いた点にも留意する必要がある。

ところで、『義演准后日記』文祿五年七月晦日条には、つぎのような記事を見いだすことができる。

去四日始而大仏供養之儀、（木食迄其）興山上人ヲ被召、被仰出候了、去十三日比、上人申送之、八月中旬頃云々、

これれば、「去四日」に「始而」秀吉は、「興山上人」こと、木食応其を召し、「大仏供養」を「八月中旬頃」におこなうよう命じたことがわかる。はたして『義演准后日記』閏七月五日条には、「大仏供養内々触状来」、そのなかの「興山上人状」から「来八月十八日、大仏供養可有御執行之由、相定」ったことがあきらかとなる。

ここにみえる「大仏供養」とは、大仏殿の堂供養と本尊の開眼供養を意味しているが、右の記事からは、少なくともこのころには公に大仏完成を披露できるような状況にまでいたつていたことがうかがえる。

もつとも、同記閏七月一二日条には、「来月供養可延引之由風聞」とあり、「大仏供養」延引のうわさもながれていた。しかも、これにつづけて同記には、「唐人来朝、為見物武者御用意延引故歟」という記事もみえ、「大仏供養」の「延引」が、「唐人」（明使節）に伏見城で見物させる予定であった「武者ソロエ」の「御用意延引」と連動したものであったとも伝えられている。

このような点から考えれば、わざわざこの時期に設定された「大仏供養」もまた、あるいは一種のイベントとして秀吉が思いついたものであるという可能性も少なくないであろう。しかしながら、「武者ソ

ロエ」も「大仏供養」もともに、くしくもこの日の深夜から未明にかけておこった大地震によつて中止に追いこまれることになった。

## （2）文祿五年閏七月の大地震以後

文祿五年閏七月一二日の深夜から未明にかけておこった大地震によつて、大仏は甚大な被害をこうむることになる。『義演准后日記』閏七月一三日条によれば、「堂無為」であつたのに対し、「本尊大破」し、また、この年に柱立てされた「中門無為」、但四方角柱少々サクル」というありさまだつたことが知られるからである。

ここからは、「大仏中門」が完成をみていたらしいことがうかがえるが、そのいっぽうで、この門とつながっていたであろう「三方之築地悉崩、或顛倒」したことがわかる。このような状態であつたため、結局のところ、「大仏供養延引」<sup>(31)</sup>にいたることとなる。

この後しばらく大仏をめぐる動きはみられないが、大地震からおおよそ一年近くたつた慶長二年（一五九三）五月二三日に「今日大仏へ太閤御所御成、本尊御覽、早々くすしかへの由仰云々」と『義演准后日記』同日条が伝えているように、大破した本尊は、秀吉の「仰」によつてとりこわされることになる。

大地震から一年というこの時期になつて、にわかに本尊がとりこわされたのは、『義演准后日記』七月七日条に「去年大地震ニ付、大仏尺迦破裂、仍今度彼尺迦コホタレテ、如来ヲ被安置之」とあるように、当時、甲斐国にあつた善光寺「如来」を大仏殿に「安置」させるためであつた。

もつとも、ここでもなぜ突然、善光寺如来が登場してくるのかといえ

「如来」が「都へ被相移、阿弥陀峯と申山之麓ニ有之度と示現」<sup>(32)</sup>し、それをうけて秀吉が「五月被仰出」<sup>(33)</sup>たからだったことがあきらかとなる。

ここからは、秀吉が本尊の再建ではなく、善光寺如来の遷座という大方の予想をこえるような選択をとったことが知られるが、ここで注意しておく必要があるのは、少なくとも史料によるかぎり、大仏と阿弥陀ヶ峰との接点がみられるもまた、このときがはじめてであったという点であろう。立地の段階では、秀吉の視野には阿弥陀ヶ峰の存在は入っていなかったと考えられるからである。

このようにして、善光寺如来は、同年七月一八日にあわただしく大仏殿へと遷座させられることになる。その移動過程や善光寺如来に供奉した人びとのありようについては、西山氏の論考にくわしい。

したがって、詳細はそれにゆずるとして、ここで注目されるのは、「関寺之阿弥陀堂ニ安置」<sup>(34)</sup>された善光寺如来をむかえるために三宝院門跡義演ら「諸門跡」が前日のうちに大津へとむかい、そして、当日、「上様より三条の橋まで御馬をも被仰付候」<sup>(35)</sup>とみえる点であろう。

ここからは、「汁谷」の地にある大仏への遷座にもかかわらず、わざわざ善光寺如来とそれ供奉する人びとは、「粟田口」<sup>(36)</sup>を通り、「三条の橋」附近にまでたどりついた後、南下する道筋をとったことがあきらかとなるからである。

このような道筋をとった背景には、天正一八年（一五九〇）に秀吉によって石柱橋として三条橋が架橋されたこともさることながら、大津をはじめとした東方からの道筋としての「汁谷通路」「汁谷口」の重要性が、以前とくらべて下がっていたことが関係しているよう。

実際、それを裏づけるように、『義演准后日記』七月一八日条には、「従大津至大仏殿、行列更に不斷、貴賤群集驚目了、伏見大名ノ男女構棧敷見物也、洛中縹素集道路美談之」とみえ、「大津」から「大仏殿」にいたる「道路」には、「伏見大名ノ男女」が「棧敷」を「構」えて「見物」し、「洛中縹素」もその「道路」に「集」り、「美談」したと伝えられているからである。

こうしてみると、善光寺如来遷座にあたっては、鴨川より西の洛中もまた、秀吉の眼中には入っていなかったかのようにも思えるが、いずれにしても、「豊臣政権の権力中枢が大坂―伏見のラインに集中した結果、善光寺如来堂の位相が、京都より伏見に引きつけられてくる」との西山氏の指摘は、この時点において的を射ているといえよう。もともと、そのいっぽうで、翌八月になると、つぎのような動きもみられるようになる。

京都 禁裏ノ東ニ、今度新城太閤御所御沙汰、大方周備云々、又西南へヒロケラル、ト云々、伏見城普請最中、大仏殿普請、佐竹以下致之云々、

これは、『義演准后日記』八月三日条の記事であり、いわゆる京都新城の普請が「大方周備」したことを伝えるものである。ここで注目されるのは、この京都新城の普請と並行して、大地震で大破した伏見（指月）城にかえて木幡山に再建された「伏見城」が「普請最中」であるとともに、「大仏殿普請」も継続しているという事実が読みとれる点であろう。



ここからは、かつてみられた大坂城・聚楽第（聚楽城）・大津城の普請と並行してすすめられた大仏普請をほうふつさせるように、京都新城・伏見城の普請と並行して大仏普請もまた、つづけられていたことがみてとれるからである。

### （3）「大仏供養」のゆくえ

こうなると、大仏の完成とは何をもつてそういえるのか、判断にこまってしまうが、ただ、完成を披露する法会である「大仏供養」がおこなわれていないという点では、たしかに公に完成したとはいいがなかったであろう。

その「大仏供養」は、じつは慶長二年七月には話題にのぼっていたことが確認できる。『義演准后日記』七月二日条に「大仏供養取沙汰在之」とみえるからである。しかしながら、それも善光寺如来遷座の騒動にかき消されてしまったようで、遷座がおわった直後、ふたたび「大仏供養九月辺云々」<sup>(37)</sup>とのうわさがながれてくることになる。

はたして八月二六日には、「善光寺堂供養、東寺ヨリ触状」が義演のもとに到来し、そこには、「善光寺如来堂供養、来月廿八日ニ可有之由、興山上人申来候」<sup>(38)</sup>との一文も見いだすことができる。

もつとも、秀吉は、「築地未出来候間、彼周備次第ト被仰出」<sup>(39)</sup>「たらしく、九月に入っても、「来月中旬之比ト被仰出」<sup>(40)</sup>と、「大仏供養」の期日をなかなかさだめようとはしなかった。

ところが、そのいっぽうで、同じ九月には、大仏の周辺で、秀吉の命令により「大仏供養」ではない大規模な法会がおこなわれたことが知られている。『義演准后日記』九月二七日条に「今日高麗人ノ耳鼻、大仏西中門ノ融ニ埋之、為後弔五山禅衆施餓鬼行之」と記されている

ように、「鼻塚」<sup>(41)</sup>が築かれ、「五山禅衆」によって大施餓鬼会がおこなれたことが確認できるからである。

ただし、実際に法会がおこなわれたのは二七日ではなく、『舜旧記』や『鹿苑日録』が伝えているように、二八日であったが、注目されるのは、その同じ日に、前々日二六日に伏見から秀吉とともに「京都禁裏展巳」<sup>(42)</sup>新宅御移徙」した「秀頼」が「参内」し、「四品中将宣下」されたという事実であろう。

「鼻塚」における大施餓鬼会と「秀頼」の参内という、奇妙なとりあわせもさることながら、ここでふたたび洛中に築かれた京都新城と大仏とのあいだに一定の関係がとりむすばれたことがみてとれるからである。

ちなみに、『兼見卿記』九月二六日条には、「太閤御父子御入洛、今度新屋敷へ御移徙云々、諸家各為御迎大仏辺罷出了」とみえ、伏見から「御入洛」する秀吉・秀頼父子を洛中に住まう「諸家」が「大仏辺」で出迎えていたことが知られる。大仏あたりは、このころになると、伏見からみれば洛中への入口、洛中からみれば伏見への出口という、いわば境界のようにみられていたことがうかがえよう。

ところで、九月二八日におこなわれた大施餓鬼会を境にして、またしばらく「大仏供養」はとりざたされなくなる。ところが、それからおよそ一年ちかかった慶長三年（一五九八）七月、不例のなか秀吉は、突然、「大仏供養可有御執行由、被仰出」<sup>(43)</sup>る。そして、七月二六日には、ついに「善光寺供養来月廿二日相定」ったことが、『義演准后日記』同日条から読みとれる。

しかしながら、翌八月一七日には、「善光寺如来、大仏ヨリ本国へ

今曉帰国<sup>(44)</sup>」し、大仏はふたたび本尊を失う。そればかりか、その翌一八日には、「太閤御死去」<sup>(45)</sup>とあるように、秀吉そのひとも失うことになるのである。

これによって、「大仏供養」はさらに延引に追いこまれることになったのかといえは、実際はそうではなく、『言経卿記』八月二二日条に「大仏堂供養有之」、また、『御湯殿上日記』同日条に「けふは大ふつたうくやう」とあるように、「堂供養」が無事おこなわれたことが確認できる。

ここによりやく大仏殿は公に完成の披露を一部おこなうことができたわけだが、しかしながら、それが実現をみることができたのは、秀吉がこの世にいなかったためである。逆からいえば、秀吉が不例などにならず、壮健でありつづけたとしたならば、「大仏供養」はさらに延引を余儀なくされていたにちがいない。

## おわりに

以上、本稿でみてきたことをあらためてふりかえってみると、当初、聚楽第・大坂城・大津城など、秀吉とその政権の拠点となる城郭や城下町との関係のなかで立地され、普請がはじめられた大仏は、鶴松死去や対外戦争、あるいは秀次事件や聚楽第・聚楽城下町の破却など、とりまく環境の変化に対応して、京都から伏見へとその関係の重心を移していったことがあきらかとなる。

いわば柔軟にその関係性を変化させることができるという特質が、秀吉が造立した大仏にはそなわっていたと考えられるわけだが、それは、大地震で本尊が大破しても、その再建ではなく、善光寺如来の遷

座によって装いをあらたにするとともに、京都新城・伏見城との関係を取りむすぶようになった点からもみてとれよう。

そういう意味では、とりまく環境に融通無碍に対応できる柔軟性こそが、秀吉が大仏にもとめつづけたものだったといえ、それゆえにまた、容易には完成にいたらなかったといえるのかもしれない。

ところで、秀吉死後、残された豊臣政権が大仏に対して真つ先におこなったことは、『義演准后日記』慶長三年九月二日条に「今日奉行衆大仏本尊造立之儀ニ被遣云々」とみえるように、「本尊造立」の計画であったことがわかる。

堂供養がおこなわれた以上、一日もはやく本尊の開眼供養が必要とされていたのかもしれないが、ここからは、残された豊臣政権が、秀吉在世時とは異なり、いわばあるべきすがたの大仏をもとめていたことがうかがえよう。

もともと、「本尊造立」が実行に移されるのは、翌慶長四年（一五九九）まで待たなければならぬ。『義演准后日記』五月二五日条に「大仏蓮台ノ上ノ宝塔取壊云々、本尊釈迦造立料云々」とあり、かつて善光寺如来がおさめられていた「宝塔」が「取壊」されたことが確認できるからである。

このように「本尊造立」までに若干の時間的な空白がみられたのは、そのあいだに秀吉を神に祝う豊国社の造立を残された豊臣政権が優先したためであろう。豊国社の正遷宮は四月一八日であり、それを待つて、右のような動きがみられるからである。

そして、同年一〇月には、「銅ヲ鑄カクル」<sup>(46)</sup>とみえ、再建される本尊が銅造であったこともあきらかとなる。ただ、銅が懸けられるのは、

「簡体」や「大座ノ蓮花」であり、「御手・御頭ハ銅ヲカケス、只木」だったことも『義演准后日記』慶長五年（一六〇〇）二月一日条などから知られる。

いっぽう、「大仏三七重塔并講堂・廻廊以下ノナワハリ、今日三奉行衆被致之云々」と『義演准后日記』同年三月一日条にみえるように、これまではみられなかった「七重塔」や「講堂」、さらには「廻廊」を普請するための「ナワハリ」もおこなわれたことがわかる。大仏に「七重塔」といえば、かつて東大寺にあったと伝わる塔を連想させるが、ここからは、残された豊臣政権が、京都に東大寺のような寺院をつくろうとしていたと考えられよう。

そのうえ、同年五月には、「今度大仏ノ築地ヲ卅三間ノ西方ニ被築テ、大仏与一所ニ成由也、礎突牀ト見了」<sup>(47)</sup>とあり、「卅三間」もとこまれて「一所」になることもあきらかとなる。

このように、秀吉死後もなお、大仏には普請がどこされつづけていたことが知られるわけだが、右のような拡大路線が秀吉の段階ですでに計画されていたのかどうかについてはさだかではない。

ただ、そのめざすところとは、かつての東大寺をかたどった、あるべきすがたの大仏の寺といわざるをえないであろう。したがって、秀吉在世時にみられたような柔軟性がかえりみられることはなかったと思われる。

なお、この間の大仏と京都との関係についていえば、京都新城には主が不在と考えられるいっぽう、慶長四年正月一日には「秀頼卿大坂へ御移徙」<sup>(48)</sup>し、そして、徳川家康が伏見に長期間滞在していることからすれば、伏見（そして大坂）との関係が濃厚であったと考えられ

よう。

また、このまま順調にいけば、大仏は、京都に東大寺を再現したかのような存在となったのかもしれないが、しかしながら、慶長五年（一六〇〇）九月の関ヶ原合戦をへて、「大仏遍照院以下、興山上人奉行共悉去」<sup>(49)</sup>り、「大仏作事ハ徳善院奉行」<sup>(50)</sup>となるにおよんで、状況は一変することになる。

たとえば、大仏に付属するものではないが、慶長七年（一六〇二）六月一日には、「豊国極楽門、内府ヨリ竹生島へ依寄進、壊始」と『義演准后日記』同日条にみえるように、豊国社の「極楽門」が「内府」（家康）の命で壊され、「竹生島」へ寄進されたことが確認できるからである。一定の修正がもめはじめられたとみることもできよう。

そして、同じ年の一二月、「本尊鑄懸」の最中に「本尊ノ身内ヨリ焼出」、「後光へ火付テ、其ヨリ堂内へ即時火炎廻テ」、大仏の中核というべき大仏殿も灰燼に帰すことになる。

ここにおいて開眼供養も夢まぼろしとなり、大仏は完成どころか、ふりだしにもどることになった。その再建がふたたび話題にのぼるまでには、およそ七年の年月が必要となるが、この七年がもつ意味は大きかったであろう。

豊臣政権の変質や徳川政権の成立といった政情の変化はもとより、七年のあいだ大仏殿も本尊も物理的に存在しないという事実、おおいようななかったと考えられるからである。

したがって、再建の話題が出はじめて以降の大仏は、その歴史的な意義においても、また、京都との関係においても、秀吉の造立した大

仏とは、似て非なるものとみるべきである。本稿が、秀吉在世時を中心にみてきたのもそれゆえであり、秀吉が造立した大仏と京都との関係を考えていくためには、まずは時期を限定して議論を深めていく必要があろう。多方面から議論がわきあがってくることを期待すると同時に、筆者自身もひきつづき検討を重ねていきたいと思う。

註

- (1) 河内将芳『秀吉の大仏造立』（法藏館、二〇〇八年）。
- (2) 京都市編、学芸書林。
- (3) 永原慶二・稲垣泰彦・山口啓二編『中世・近世の国家と社会』（東京大学出版会、一九八六年）、のちに三鬼清一郎『織豊期の国家と秩序』（青史出版、二〇一二年）に所収。
- (4) 『塚本学先生退官記念論集 古代・中世の信濃社会』（銀河書房、一九九二年）。
- (5) 河内前掲『秀吉の大仏造立』、河内「京都東山大仏の歴史的意義をめぐって―書評・安藤弥「河内将芳著『秀吉の大仏造立』」に接して―」（『新しい歴史学のために』二八六号、二〇一五年）参照。
- (6) 佐藤信・吉田伸之編『新体系日本史 6 都市社会史』（山川出版社、二〇〇一年）、のちに杉森哲也『近世京都の都市と社会』（東京大学出版会、二〇〇八年）に所収。
- (7) 『義演准后日記』（史料纂集 文禄五年正月二九日条）。
- (8) 『言経卿記』（大日本古記録 文禄四年九月二一日条）。
- (9) 『言経卿記』 天正一九年三月二九日条。
- (10) 河内前掲『秀吉の大仏造立』参照。
- (11) 史料纂集。
- (12) 『言経卿記』 天正一三年二月二八日条ほか、河内将芳『戦国京都の大路小路』（戎光祥出版、二〇一七年）参照。
- (13) 『京雀』 卷七（『新修京都叢書』第一巻）。
- (14) 一五八六年十月十七日付、下関発、パードレ・ルイス・フロイスよりインド管区長パードレ・アレッサンドロ・バリニヤノに贈りた

- るもの（村上直次郎訳・柳谷武夫編『新異国叢書 イエズス会日本年報』下、雄松堂書店、一九六九年）。
- (15) 藤井譲治「豊臣秀吉の居所と行動」（藤井譲治編『織豊期主要人物居所集成』 思文閣出版、二〇一一年）。
- (16) 『石山本願寺日記』 下巻。
- (17) 『真宗史料集成』 第四巻 専修寺・諸派（同朋舎出版、一九八三年）。
- (18) （年月日未詳）某書下（『仏光寺派古文書』）。
- (19) 『新修京都叢書』 第七巻。
- (20) （天文一二年）三月二〇日付茨木長隆書下、天文一二年六月五日付室町幕府奉行人連署奉書（『早稲田大学所蔵 荻野研究室収集文書』）。
- (21) 河内将芳「中世京都「七口」考―室町・戦国期における京都境域と流通―」（『ヒストリア』一六八号、二〇〇〇年）、のちに河内『中世京都の民衆と社会』（思文閣出版、二〇〇〇年）に所収。
- (22) 河内将芳「三条橋、そして秀次と妻子の塚」（『本郷』一二二号、二〇一六年）。
- (23) 『四条橋新造之記』（『都のにぎはひ』）。
- (24) 藤井氏前掲『豊臣秀吉の居所と行動』 参照。
- (25) 増補続史料大成。
- (26) 『史籍雄纂 当代記・駿府記』（続群書類従完成会）。
- (27) （天正二〇年）一〇月一〇日付豊臣秀吉朱印状（妙法院史料研究会編『妙法院史料 第六巻 古記録・古文書』 吉川弘文館、一九九一年）。
- (28) 史料纂集。
- (29) 『改定史籍集覧』 第二五輯。
- (30) 『義演准后日記』 文禄五年七月五日条。
- (31) 『義演准后日記』 文禄五年閏七月一三日条。
- (32) 駒井重勝著・藤田恒春編校訂『駒井日記 増補』（文献出版、一九九二年）。
- (33) 『鹿苑日録』 慶長二年七月一八日条。

(34) 『義演准后日記』 慶長二年七月一七日条。  
 (35) (慶長二年) 七月六日付興山上人応其書状 (『大日本古文書 高野山文書之三』)。

(36) 『兼見卿記』 慶長二年七月一七日条。

(37) 『義演准后日記』 慶長二年七月二三日条。

(38) 『義演准后日記』 慶長二年八月二六日条。

(39) 『義演准后日記』 慶長二年八月二九日条。

(40) 『義演准后日記』 慶長二年九月七日条。

(41) 『鹿苑日録』 慶長二年九月二八日条。

(42) 『義演准后日記』 慶長二年九月二六日条。

(43) 『義演准后日記』 慶長三年七月一五日条。

(44) 『義演准后日記』 慶長三年七月二六日条。

(45) 『舜旧記』 (史料纂集) 慶長三年八月一八日条。

(46) 『義演准后日記』 慶長四年一〇月一九日条。

(47) 『義演准后日記』 慶長四年五月一二日条。

(48) 『義演准后日記』 慶長四年正月一〇日条。

(49) 相田文三「徳川家康の居所と行動」(前掲『織豊期主要人物居所集成』)。

(50) 『義演准后日記』 慶長六年五月七日条。

(51) 『義演准后日記』 慶長七年一二月四日条。

〔付記〕 本稿は、二〇一七年五月七日、第三四回平安京・京都研究集会「東山大仏と豊臣政権」(於、機関紙会館五階大会議室)において報告した内容をもとにしたものである。筆者と同じように当日報告された長宗繁一氏、登谷伸宏氏をはじめ、多くの方々に貴重なご意見をたまわった。記して感謝申しあげたい。また、本稿は、二〇一六(一八年度)日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究C・課題番号一六K〇三〇六三の研究成果の一部である。